



Title	ウポポイでの学び、ウポポイへの期待 : 「多文化共生のまちづくり」の視点から
Author(s)	貳又, 聖規
Citation	境界研究, 12, 143-149
Issue Date	2022-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.12.143
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85041
Type	departmental bulletin paper
File Information	09.pdf



[特集：ウポポイの／での研究]

【コラム：白老町にとってのウポポイ】

ウポポイでの学び、ウポポイへの期待 ——「多文化共生のまちづくり」の視点から——

貳又 聖規

はじめに

2020年のウポポイ開設に伴い、白老駅のリニューアルや国道36号線の拡幅、商店街への新規出店などが相次ぎ、白老町の景色は大きく変わった。

私は1972年にこの町で生まれ、1990年より白老町役場に奉職。2019年に退職するまで29年間、観光振興や地域振興に携わってきた。現在は白老町議会議員を務めながら、BLUE SALMONという地域商社およびコンサルティング事業を営んでいる。自分の中にあるアイヌのルーツを意識したのは小学校二年生の頃。それに誇りを持って生きていこうと決意したのは2016年、44歳の時のことだった。何が転機となったのかについては、また後ほど触れる。

本稿では、上記のような経歴と背景を持って白老のまちづくりに関わってきた立場から、今後のウポポイに期待することを挙げてみたいと思う。

白老町の歴史と多文化共生の理念

本題に入る前に、まずは白老という町の概要を説明したい。白老の歴史の始まりは1620年ごろ、日高アツベツのアイヌ、イペニックルが一族を率いて当地へ移住したという記録がある。「白老」の地名は、アイヌ語の「シラウ・オ・イ(虻・多き・ところ)」に由来するといわれている。公式に町の開基とされているのは1856年、江戸幕府から北方警備の命を受けた仙台藩が元陣屋を築いた年である。時代は下って1919年、二級町村制の施行により社台・敷生・白老の三つの村が合併して白老村となり、1954年には町制が施行されて白老町が誕生した。

現在、約一万六千人の人口を擁する町の領域は海岸線に沿って長く伸び、地区(社台・白老・石山・萩野・北吉原・竹浦・虎杖浜)ごとに独自の文化が根付いている。たとえば、町の最西部に位置する虎杖浜地区では、新潟からの移住者が伝えた越後盆踊りが今なお盛

んだ。このように、アイヌも含めさまざまなルーツを持つ人々が町の発展を支えてきた経緯があり、白老町には多様な文化を受け入れる風土がもともと備わっていたように思われるのだ。

そうした中、2015年に「多文化共生のまちづくり」の取り組みが白老町で始まった。この取り組みの理念には、重要なポイントが二点ある。一つ目は、「多様性と包摂性の重視」である。数値目標で示されるような多様性の有無だけでなく、その多様性が社会の中に包摂されているかを吟味する視点を大切にするという意味である。二つ目は、「公平性と公正性の違い」。すべての人をただ公平・平等に扱うというのではなく、格差を認識・是正し、真に公正な結果を得られるようにするということである。

白老町が目指す多文化共生のモデルは、異文化が溶け合って同一化した状態になる「るつぼ型」ではない。サラダボウルの中のレタスやトマトといった野菜が、それぞれの味を保ったままお互いを引き立て合う「野菜サラダ型」である。そこへ町の特徴を生かしたオリジナルドレッシングをかけることで、より魅力ある一皿に仕上げていく——このようなイメージで、多文化共生のまちを構築するための取り組みが続けられている。

一人ひとりの想いを起点に——役場時代に得た気づき

私が役場職員としてまちづくりに取り組む中で得た気づきの一つに、「一人ひとりの住民の想いから出発することの重要性」がある。

というのも、国や都道府県、市町村の政策というのは、いつも上から下りてくるものだからだ。白老町のまちづくりも、役場職員がシナリオを考え、住民をそこに乗せていく形で進んでいた。この点に、私は違和感を覚えたのである。

怒り、哀しみ、そして喜び。一人の住民が秘めている想いには、きっと他の人にも共通するものが含まれているはずだ。それを対話の中から見つけ出し、地域課題としてとらえ、政策立案につなげていくスキルが自治体職員に求められているのではないか。このように考え、2014年から職務とは別にプライベートで「聞き書き」の取り組みを始めた。アイヌのルーツを持つ高齢者や若者に、差別体験などについて話を伺うというものだ。

就職しても一向に正社員になれなかった、結婚の際に相手の身内から反対された、などと怒りや哀しみを語る人もいれば、幼少期に祖父母から教わった森遊びの思い出を懐かしみ、アイヌの子育ての素晴らしさを嬉々として伝えてくれる人もいる。聞き書きした個々人の想いの中に、私は「薪」を見いだす。ここでいう「薪」とは、「皆に共通する課題」を意味する。「薪」に「火」をつける、つまり、発見した普遍的課題を解決するためのアクションを起こしていくことが、多文化共生のまちづくりの要になると私は考えたのである。

「薪」からアイデアを得て具体的なアクションを起こした一例として、役場職員として活動した29年間の集大成ともいえる「巨大パッチワークづくり」のプロジェクトをここで紹

介したい。

2016年11月、アイヌのルーツを持つ70代の女性から相談を受けた。「2020年に国立アイヌ博物館ができるのに、多くの町民はアイヌ文化に無関心。何か皆と一緒に取り組める企画を考えてほしい」。この一言を発端に、町民から大量の布を集めてアイヌ刺しゅうを施し、縫いつなげて巨大なパッチワークを制作するという一大プロジェクトが始まったのである。

企画に際して重視したのは、次の四点である。第一に、「温故創新」。ウポボイが白老に開設されることになったのは、先人たちの弛まぬ努力のおかげにほかならない。彼らに敬意を払い、過去から学んだ風習などを未来へ継承すること、さらに新しい文化を創造していくことが求められる。パッチワークづくりは、国の社会生活実態調査で手芸・編み物の行動者率がトップクラスである北海道、中でも「女性は手仕事ができ一人前」と考えるアイヌの伝統が残された「手仕事のまち」白老にふさわしい文化活動であると思われた。第二に、「共感」。「多文化共生」は、漢字ばかりで難しい行政の言葉。それを子どもからお年寄りまで、また日本語の通じない海外の人々にも広く理解してもらうため、パッチワークという非言語的な表現で感覚を共有できればと考えた。

第三に、「目に見える課題の向こうにある本質的な課題に気づいているか」、「普遍性に向かって絞り込みができてきているか」という視点。パッチワークを完成させること自体が目的ではなく、それを通して課題解決に近づけるかどうかが大切だ。アイヌの抱える問題を他人事として眺めるのではなく、一人ひとりが自分事としてとらえ、アクションを起こしていくきっかけになりうるような取り組みとなるよう配慮した。

最後に、「住民が主体になること」。パッチワークで白老町の目指す多文化共生を表現するには、行政主導ではない住民運動への発展が不可欠だった。はたして2017年2月、町の広報誌で協力を呼び掛けると、わずか一カ月の間に3,368枚の布の提供と142名の町民の参画を得られた。亡母の思い出の品、子どもが幼少期に着ていたシャツの一部など、さまざまな想いの込められた17センチメートル四方の布が、数多くの住民の手で一枚一枚つなぎ合わされていったのである。

まさに多文化共生の理念を体現するものとなった巨大パッチワークは、見る人の心に共感と感動を呼びおこした。やがて活動の範囲は海外にまで広がり、ロシア・サンクトペテルブルグの民族学博物館に作品を寄贈したり、台湾の先住民族・ブヌン族と白老の子どもたちが歌とパッチワークで交流したりといった展開も生まれた。

2017年11月、私は白老町内の刺しゅうサークルのメンバーを引率してハワイ島ヒロ市へ赴き、ハワイアンキルトクラブとの交流を行った。その際、一度は消滅しかけたハワイアンキルトを復興させたという、伝説のキルトクラブに所属されていた日系二世、トモエ・オケタニさん(当時92歳)と意見交換する機会にも恵まれた。対話の中で特に印象に残

ったのは、「ハワイアンキルトに名前を付けると魂が宿る」という、アイヌにも通じる精神文化である。実際、彼女が10年の年月をかけて制作した大作“Hiro Beauty”には、聖なる力を感じた。これに倣って、私たちの巨大パッチワークにも名前を付けることにした。たとえば「パイカラ(春)」と名付けられた作品には、アイヌ文化がこれから春を迎えようとしているという想いが込められた。

一人の住民の想いから見出された「薪」が、町内から海外にまで広がる大きな「火」を燃え上がらせることとなった巨大パッチワークづくり。この取り組みを通して、私はあらためて“The personal is political”、個人の問題は社会全体の問題であると再認識した。

ウポイに対しても、このような視点を持って普遍的な課題の解決を目指す取り組みを期待する。具体的には、差別体験の語り部を教育旅行等のプログラムに導入することが望ましいと考える。生の声からにじみ出る想いに耳を傾けることで、聞き手がそれぞれ「薪」を見つけ、新たな「火」を起こすことにつながっていけば、多文化共生の理念を白老から広く発信していけるのではなかろうか。

アイヌ文化の尊重と継承——ルーツと向き合う中で

役場職員としてまちづくりに取り組む日々は、非常に充実していた。一方で、もどかしさを感じる場面も少なくなかった。自治体の組織の中では自分が思い描くビジョンを十分に実現できない、もっとダイレクトにまちづくりに関わりたいという想いから、やがて「起業」という言葉が頭をよぎるようになっていった。

そんな最中の2016年、転機が訪れた。私は、アメリカ合衆国のオレゴン州ウォームスプリングスを訪れ、ワスコ族という先住民族のリーダーに話を聞く機会を得た。「あなた方はどのような考えを持って文化を継承しているのか」と尋ねたところ、「我々は自分の孫、玄孫の世代まで、200年後の未来を見据えて自らの文化とこの大地を継承する取り組みを行っている」という答えが返ってきて、そのスケールの大きさに衝撃と尊敬の念を覚えた。

すでに述べたように、私にはアイヌのルーツがある。母方の五代前の祖先は、白老社台に生きた海の民、ヤノンチヨ。また別に、シユフコリという日高門別の山の民も家系の中に含まれている。しかし、この時まで、あえてその事実と向き合おうとはしてこなかった。

日本から遠く離れた地で、祖先をリスペクトし掛け替えのない文化を未来へと引き継いでいく魂にふれた私は、ようやく自分自身の中にあるルーツを直視するようになった。それと同時に、祖先たちが残してくれた自然豊かな大地を守り、育て、子孫に伝えていく責務があるという想いを強く抱くようになった。

三年後の2019年、白老町役場を退職して創業するにあたり、社名を「BLUE SALMON」と決めた。アイヌにとっても海外の多くの先住民族にとっても重要な食料・文化資源であ

り、神からの贈り物とされているサーモンは、私たちが未来に継承していくべきさまざまなものを代表するシンボルとしてふさわしいと考えたからである。

サーモンを象徴とした国際的な先住民族ネットワークを構築し、サーモンサミットを開くことは、今後の私の夢の一つでもある。ゼロからモノを創りあげる企画力、人と人をつなぐコミュニケーション能力など、役場時代に培ってきたスキルを最大限に生かし、地域に根差しながらグローバルな視点で事業を展開していくつもりだ。

さて、アイヌのルーツを自覚しながら世界へと目を向けるようになった現在の立場から、国立施設としてのウポポイに期待することがある。日本が先住民族政策において国際社会から尊敬を勝ち得るには、まずアイヌ文化を大切にしようという気持ちをもっと国民に浸透させなければならない。そのための具体的な方策として、ウポポイ自身がイニシアティブを取って、言語復興に向けた取り組みや、未来を担う人材を育成する施設の整備・拡充を積極的に推し進めていく必要があると考える。

垣根を超えた連携——議員として感じる課題

起業した直後の2019年10月に、私は白老町議会議員選挙へ立候補した。議員という立場から、「BLUE SALMON」の事業とはまた異なるアプローチでまちづくりに寄与できるのではないかと考えたからである。

全国1,741の市町村の中でも、白老町は今、とても大きな使命を担っていると感じている。「平和のまち」、「環境のまち」、そして「多文化共生のまち」にふさわしい、大義あるまちづくりが求められている。私もまた議員の一人として、人権尊重に関する条例の制定や漁業振興、アイヌ文化の継承と発展等に向けた政策提言に尽力しているところである。その過程で浮かび上がってきた課題として、行政や地域エリアを超えた連携の必要性が挙げられる。たとえば、アイヌ文化に関する取り組みでは、阿寒や平取といった各伝承地とのつながりが今後ますます求められるようになっていく。

同じことは、ウポポイについても言える。差別を始めとする普遍的課題の解決にせよ、言語復興や人材育成にせよ、一施設の枠組みの中だけで実現しうるものでは到底ない。国・北海道・白老町といった組織の垣根を超えて目的や理念を共有し、役割を分担しながら取り組みが進められていくことを期待している。

おわりに

本稿では、私の役場職員としての経験と、アイヌのルーツをもつ民間事業者および町議会議員としての活動を通して感じたウポポイへの期待について述べてきた。多文化共生のまちづくりと同様、理想を実現するための道は決して平坦ではないが、今後も弛まぬ進化と発展がなされることを切に望む。

私自身、役場を退職して起業することを決意するまでにはとても大きな勇気を必要とした。そんな時に、未来へ向けて一步を踏み出すようにと背中を押してくれたのは、白老出身のアイヌ歌人、森竹竹市(1902-1976)の言葉だった。生前、貳又家とも深い親交のあった彼の詩を最後に紹介して、本稿の結びとしたい。

アイヌ亡びず

彼はアイヌとして生れたり
幼少の頃 和人(シャモ)の子の嘲笑に泣き
長じて社会の侮蔑に憤る

彼は伝統のくらしの業をすて
シャモの真っ只中へとびこむ
鉄道員！ 時、大正八年一
彼は勤務(つとめ)を励み学びにいそしむ

燃ゆるがごとき彼の情熱は
詩歌となり熱弁となって
社会へ、ウタリへ訴えつづける

われらこそ先住の民胸はって
誇りとともに強く生きよう

あゝ この悲痛な彼の叫びも
今は遠いかなたに消え去る
悔り(ママ)も蔑みもない現実(いま)の世に
彼我の子等は喜々として戯れ遊び

若き者は自由にまじわり結ばれてゆく
彼等は祖先よりうけついで民族のトク性

シレトク 眉目秀麗
テケトク 刺繍彫刻に見る芸術性
パウエトク 巧みなる弁舌
ラメトク 勇気

これを誇りとして力強く
社会に踏み出してゆく

そこで
彼はうたう！
これでいい！　これでいいんだ!!
アイヌの風貌が
現代から没しても
その血は！
永遠に流るゝのだ
日本人の体内に。⁽¹⁾

(1) 山川力編『レラコラチ 風のように：森竹竹市遺稿集』えぞや、1977年。